

嘉南大圳設計者 八田與一技師 (3)

—台湾で愛され日本人に知られていない偉大な土木技術者—

川 本 正 之

- | | |
|------------------|---|
| (1) 姿を現した銅像 | (7) 不毛から肥沃へ—10年の月日を費やして嘉南大圳が完成— |
| (2) この人の事を知ってほしい | (8) 李登輝氏は語る—米とサトウキビの増産で稼いだ外貨「八田さんの本当に大きな貢献は3年輪作だと思う」— |
| (3) 胸に抱く大計画 | (9) 撃沈—いつ死んでもお国のためなら本望じゃないか— |
| (4) 家族とともに | (10) 陽光浴びる銅像—大変な恩恵をもたらした技術に国境はない— |
| (5) 前例なき工法 | |
| (6) 二つの試練 | |

(本文中敬称略)

(7) 不毛から肥沃へ—10年の月日を費やして嘉南大圳が完成—

台南は台湾でも最古の街で、約四百年の歴史を持つ。城跡など史跡も数多いが、その反面周囲に広がる嘉南平野は台湾で最も貧しい土地だった。

かつて嘉南平野には「看天田」（台湾語でクアティーツァン）という言葉があった。空の雲行きを見て耕作する。運を天に任せた田という意味だ。農業に必要な水は雨水が頼りの溜池から桶で汲み上げたり、足で踏んで車輪を回し揚水するだけだった。

台湾は元来、雨の多い地域だ。年間降水量は世界平均の2.6倍（2,500 mm）と、日本（1,800 mm）や欧州各国（600～800 mm 台）をはるかに上回る。ただし、降雨や地下水が豊富なのは台湾内でも北部と東部で、嘉南平野は降雨が少ないだけでなく、その9割が5月から10月の雨期に集中する。土地は平坦で排水も悪く、洪水か旱魃が常だった。海が近い地域では塩害もひどく、地表が白くなっていた。だが、台湾でもこの時代を知る人はもうほとんどいなくなった。不毛の大地だった嘉南平野が緑の沃野へと姿を変えたのは、今から約75年前のことだ。

昭和5年（1930）3月、嘉南大圳は10年の月日が費やされて完成した。ダムが満水になるまで2ヶ月かかり、

約1億5千万トンの水が山ひだを縫うように入り込んで複雑な形をした人造湖が姿を現した。その輪郭から「珊瑚潭」と命名された。

同年5月15日、嘉南大圳*の通水式が行われ、ダム直下の水門から毎秒70トンの水が噴出した。烏山頭では與一も出席して祝賀会が開かれ、関係者が別れを惜しむかのように三日三晩のお祭り騒ぎが続いた。

與一は昭和5年（1930）8月、住み慣れた烏山頭を離れ、台北の総統府に帰任することになった。所長の永年の業績を記念するために、職員らの交友会が與一の銅像を作ることを申し出た。與一は、銅像を贈りたいという話に感激し感謝しながらも、「堰堤は、私だけが造ったのではない。気持ちはありがたいが…」しかし、総代の人々は、「交友会のシンボルとして、私たち全従業員の心の糧として作りたいのです」。與一は「全従業員のために…」と言われると、それ以上辞退することはできなかった。

「ありがたいことだが、お願いがある。よく見かける



写真—8 満水になった珊瑚潭貯水池。まだ工事用レールが敷かれたままになっている。（古川勝三著「台湾を愛した日本人」より転載）



写真—9 導水路を流れてきた水が南幹線と北幹線に分かれる工事中的分水門（古川勝三著「台湾を愛した日本人」より転載）

*「嘉南大圳」文中たびたび出てくるが、これの意味は「嘉南」は勿論地名である。「大圳」の「大」は、大きいという意味であるが術違いに大きいとなる。圳は、水路を指す意味で、日本の漢字になくて今回苦労した字である。

なお、本文をまとめるにあたって、出版社及び著者の了解を得て下記の参考文献から一部、写真及び文章を引用・転載しました。

1) 産経新聞「凜として」取材班、「凜として 日本人の生き方」、産経新聞（2005）
2) 古川勝三著、「台湾を愛した日本人」、青葉図書

正装し、威厳に満ちた格好で高い台座に立つ像にはして欲しくない」など希望を述べたと言う。地面に腰掛けるという珍しいスタイルは、與一の希望であったのかもしれない。

銅像は金沢の彫刻家・都賀田勇馬が作り、台湾に送られてきた。明治の彫刻家・朝倉文夫の弟子筋に当たり、ロダン風の粗削りな作風を特徴としていた。昭和6年7月31日、銅像はダム北側の小さな丘に置かれた。台座はなく、じかに草むらに座る格好だ。現在、像の置かれている場所の約1m前にあった。

(8) 李登輝氏は語る一米とサトウキビの増産で稼いだ外貨

「八田さんの本当に大きな貢献は3年輪作だと思う」—

李登輝^{りとうき}台湾前総統が名誉会長を務める「台湾総合研究院」は、日本時代に「台湾八景」の一つに数えられた台北郊外の淡水にある。高層ビル上階のオフィスから亜熱帯の空気を通してマングローブが広がる淡水河の河口を見下ろせた。

八田與一の話が専門の農業経済に及んだためか、李登輝は興に乗って楽しそうに話し続けた。輪作とは、同じ土地に稲・サトウキビ・芋など複数の作物を何年かに1回（この場合3年）のサイクルで作る作付け方式。與一が造った嘉南大圳は、灌漑できる水の量が全地域で3分の1しかないために考えられた。

「技術者は、これだけの水しかないからこれだけ灌漑すればいいとしか普通考えないんだ。だが八田さんは5万町歩（ヘクタールとほぼ同じ）分の水で、15万町歩の農家に利益を^{あまね}遍く与えようとした。農民への福祉的な考えが強いんだな。こういうことに頭を使っているところが、僕は並大抵じゃないと思ったなあ」

しかし、嘉南大圳や3年輪作は当初から経済学会で評判が悪かった。その論旨は、米は台湾で年に2度獲れるが、サトウキビは生育に18ヶ月掛かるのだから、独占資本である製糖業保護に過ぎない、というものだ。

だが、李登輝は逆の事実を指摘する。

「これもあなた方があまり知らないことだけれど、台湾が^{ほうらいまい}蓬莱米を売り

出した時、日本に対する移出がすごいんだ。一番儲けたのはだれだと思う。台湾の地主なんだよ」。

「蓬莱米」は大正11年（1921）磯永吉が台湾総督府農業試験場で開発した、台湾の気候でも育つジャポニカ種の米だ。台湾古来の米は粘りがなく、日本人の嗜好に合わなかった。だが日本米とよく似た蓬莱米は値段も安く、内地への販売が急増した。とりわけ台湾は2期作で6月に収穫できるのが強みだった。

昭和12年（1937）になると、嘉南大圳灌漑区域内の米の生産額は工事前の11倍、サトウキビは4倍と、それぞれ予想を大幅に上回る大成長を見せた。農業生産額全体も工事前より3600万円増えた。土地価格も5千万円から2億円に跳ね上がっている。つまり、嘉南大圳の建造費の5400万円は、十分に元が取れた計算になる。嘉南平野は豊かになった。米とサトウキビはどちらも大幅に増産されたが、とりわけ伸びたのが蓬莱米だった。

李登輝の講義はまだ終わらなかった。

「台湾の地主が大変なお金を得るようになり、農村組合にどんどん預金が集まる。地主たちは組合連合会を作りたいと要望したが、総統府が却下した。資金量が何と当時の台湾銀行より多いんだ。大変なことになったんだ」

しかし、昭和15年（1940）ごろから、日本は台湾での製鉄など工業化にも力を入れ始めた。そのときにこれらの地主の預金が改めて注目される。この資金で産業銀行が設立され、工業化に融資を行った。いわば、嘉南の米やサトウキビが台湾の産業高度化を下支えし始めていた。

この構造は戦後も続く。昭和40年（1965）ごろまで主な輸出品は米と砂糖だった。稼いだ外貨が工業化に転嫁され、奇跡といわれた経済成長を実現した。

李登輝は平成14年（2002）11月、「日本人の精神」と題して慶応大学で講演する予定だった（<http://www.aeda.net/asia/leelecture.html>）。嘉南大圳を造った八田與一に見る「公に奉ずる精神、社会主義、率先垂範、実践躬行」などの要求を、「ますます不可欠な道徳体系」である日本精神として紹介する予定だったが、外務省にビザ発給を拒否され、いまだに果たせずにいる。*

與一は戦後の台湾を見ることはなかった。しかし半世紀にわたって、その経済発展を支えたと知れば、嘉南大圳に生涯を賭けたことに悔いはないと感じただろう。

(9) 撃沈—「いつ死んでもお国のためなら本望じゃないか」—

昭和16年（1941）末、米国との開戦に踏み切った日本



写真—10 八田與一や嘉南大圳を語る李登輝台湾前総統（産経新聞「凜として 日本人の生き方」より転載）

*その後、訪日は平成16年（2004）12月に実現された。

軍はフィリピンに上陸した。翌年になってもマニラ湾湾口を塞ぐ島にある「コレヒード要塞」攻略に手間取っていたが、フィリピン開発には早々と手が着けられた。

当時、フィリピン農業の大半は、米国へ輸出する砂糖の原料のサトウキビ（甘蔗）だった。だが、今や米国市場は失われた。

その一方、日本は広大な地域を占領下に置いたことで、域内にさまざまな物資を供給する必要に迫られていた。布地にする綿花の確保もそのひとつで、サトウキビ畑を綿花畑に置き換えることが計画された。5年間に綿花の耕作面積を17倍、50万ヘクタールに拡大するのが目標で、何よりも大規模な灌漑整備が必要となる。

昭和17年（1942）3月、八田與一のもとに「比島軍司令部」から台湾総督府を通じて要請が来た。フィリピンでの10月の綿花作付けに間に合うよう、灌漑専門家として指導してほしいというのだ。台北の與一の家では次女の綾子の結婚式が間近だった。

與一は船でいったん日本に戻り、広島・宇品港から「大洋丸」（約1万4千トン）に乗り込んで、フィリピンのマニラ港に向かうことになった。

第一次大戦の賠償としてドイツから取得した客船だった。甲板には陸軍の歩兵砲が据え付けられ、潜水艦を威嚇する疑砲まであった。「若い者がどンドン戦地に行って身を捧げているのに、自分のような者は、もう一つの仕事も残したし、いつ死んでもお国のためなら本望じゃないか」と口癖のように言っていた。

出港3日目の5月8日午後6時半、五島列島沖の船中

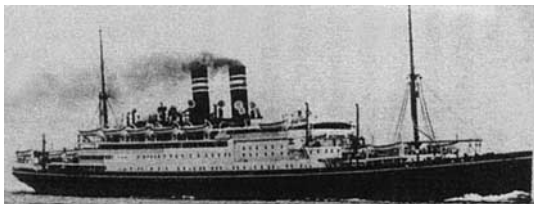


写真-11 八田與一や南方開発要員が乗込み五島列島沖で米潜水艦に撃沈された大洋丸（産経新聞「凧として 日本人の生き方」より転載）



図-3 大洋丸の沈没位置（産経新聞「凧として 日本人の生き方」より転載）



写真-12 台湾総督府の夏季の官服を着た八田與一（金沢市立ふるさと偉人館提供）（産経新聞「凧として 日本人の生き方」より転載）

でコレヒード要塞陥落の祝宴が開かれ、台湾総督府から来た與一と宮路末彦、湯本政夫の技師3人は士官待遇で、一等食堂に招かれた。あまり酒を飲まない與一は早めに食事を終え、たばこを吸っていたという。

同日午後7時31分、大洋丸から約1.5 km離れた地点から米潜水艦グレナディア号は4本の魚雷を発射した。昭和16年（1941）12月8日の真珠湾攻撃の翌日、米海軍は日本船舶への「無制限」攻撃を潜水艦に命令した。商船でも無警告に撃沈する作戦で、戦時国際法違反とされる。

午後8時40分、大洋丸は艦首から逆立ちして海に消えた。駆逐艦が夜を徹して救助を続けたが、一夜明けると穏やかな海は一面に死体漂う死者の海となっていた。大洋丸の撃沈で1360人中、817人が死亡した。三菱商事45人、三井物産27人など、大手企業の社員に犠牲が多かった。

海流で流された大洋丸の犠牲者の遺体は、昭和17年（1942）6月1日から対馬の沿岸で多数発見され始めた。6月10日、山口県萩の漁師が沖合いで與一の遺体を網にかけ、浜辺に持ち帰った。東京帝大の学生だった長男の晃夫は台湾総督府の東京事務所から連絡を受け、萩に向かった。遺体は棺に入れられ、砂浜に仮埋葬されていた。晃夫が遺体を見ると、遺留品で父と確認できたが、「あごの骨を見てすぐにわかりました」と、晃夫（83）は振り返る。56歳の與一は、総督府に数人しかいない「勅任技師」という高位にあり、遺骨は台湾に持ち帰られて、台北で盛大な葬式が営まれた。

烏山頭ダムでも慰霊式が行われ、開かれた送水路の水門からは水が激しく噴出した。終戦まで毎年5月8日、烏山頭では慰霊のためこのような放水が続けられた。

（以下、次号）

記 2005年4月29日

JCMA

【筆者紹介】

川本 正之（かわもと まさゆき）
社団法人日本機械土工協会
技術委員長